

## 1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

私が\* 沖の百万坪を歩いていると、水路で少年たちが魚をしゃくつていた。近よつて覗いてみたところ、バケツの中に鮒が十二、三尾もいた。私はちよつとふところを考えてから、おもむろに少年の一人に話しかけた。すると彼らは号令でもかけられたように、水の中でしゃくつていた者も、魚を追い出すために杭や藻の陰を突つついていた者も、いちどきに私のほうへ振り返つた。

「蒸気河岸の先生だ。」と一人が他の者に囁き、それから湧を横なでにして私を見上げた、「——なんてっただえ。」

その鮒を売ってもらえないか、という意味のことを私は繰り返した。彼らの顔になにか共通のものが走り、さつと緊張にとらえられるのが認められた。そのとき私は「しまった。」と思った。なにがどうしまったのか不明のまま、ひじょうな失策をした、ということ直観したのであった。

少年たちは顔を見交わした。

「\* 売んか。」と一人が他の者に言った、「蒸気河岸の先生だぞ、な、売んか。」

① 少年たちは唾をのみ、水漬をすすり、バケツの側にいた一人は片足の親指で片足のふくらはぎをかいた。「いやじゃねえけどよ。」と一人はバケツへ手を入れて一尾の鮒をつかみあげ、金色にうるこの光るその獲物をさも惜しそうに、また自慢そうに、そして私の購買欲をそそるように、ほれぼれと眺めながら言った、「こんな\* えっけえ金鮒はめつたに捕れねえからな。」

「ンだ、\* みせえま。」次の一人も一尾つかまえ、私のほうへ差し出しながら言った、「鯉つこくれえあんべえがえ。」

さらに一人、さらにまた一人と、六人いる少年たちが全部、暗黙のうちに共同戦線を張つて、② 私を\* 懐柔し、征服しようとした。彼らの眼は狡猾な光を放ち、その表情には鬪争的な\* 貪欲さがあらわれた。

「売んか、な。」と少年の一人が仲間と言った、「\* 売んべや、な、かんぶり。」

かんぶりと呼ばれた少年は湧をすすり、上眼づかいに私を見、またバケツの中の鮒たちを見た。その少年は船宿「千本」の長の同級生で、背丈が小さく、体も痩せているが、頭だけが大きく、しかも鉢がひらいていた。かんぶりとはその\* 木槌頭に付けられたあだ名で、つまり「かぶり」というのが訛つたのだと思う。これは私の想像にすぎない。本当の意味はべつにあるのかもしれないが、とにかく、かんぶりは仲間の\* 与望になつて③ 戦線の右翼に立った、というふうに見えた。

「鮒は十五いんだ。」とかんぶりは言った。「いくらで買つてくれつかえ、先生。」

④ 私はふところを考えてから答えた。

「えつ。」とかんぶりは眼をみはり、きおいこんでバケツの中から鮒をつかみあげ、——それはもつとも大きな一尾であった、——私のほうへ突き出しながら言った、「しよつから、へいってみせえま、このくれえの鮒は一つで\* 五ひやくもすんだぞ、先生。」

このちび助め、と私は心の中でののしつた。「しよつから」とは、この土地にある佃煮屋で、彼はその店で売っている鮒の甘露煮を引き合ひにだしたのだ。たしかに、そのくらい大きな鮒の甘露煮なら五ひやく程度は取られるかもしれない。私は頭が熱くなるのを感じた。調味料や燃料を使い、売り物としてきれいに注意深く仕上げられた鮒と、同一に比べるとい

う法はないだろう。しかしまた、甘露煮にすれば一尾それだけの値になる物を、十五尾まとめて<sup>\*まる</sup>〇三十で買うという根性も、相手を子供とみくびっているようでさもしいとも言える。<sup>⑤</sup>前者の怒りと後者の恥とで、私は頭がほてってくるのを感じ、その複合したやりきれない感じに耐えられなくなつて、値段を〇五十とつりあげた。少年たちはいっばし商売人のよ

50

うにねばつた。六人いるから〇五十では分配がしにくい、もう<sup>\*</sup>一かん出してくれ。たった一かんくれえ惜しんでも倉が建つわけでもあんめえし、と言つた。——それはこの土地の通り言葉で、なにかというときよく使われた。ビールをもう一本飲もうとか、浦柏亭<sup>うらかしやう</sup>（寄席）へなにわぶしを聞きに

55

ゆこうとか、煎餅<sup>せんぺい</sup>でも買わないかなどという場合、相手が渋つた顔でも見せるとすぐに、その言葉を投げつけるのであつた。だが私は閉口しなかつた。それで不足ならやめにしよう、と言つた。みずからおのれをけがすよ

60

うな、やりきれない自己嫌悪と闘いながら。少年たちは相談をし、私の決心が変わらないことを認めて、ようやくその取り引きは成立した。  
中二日おいて、三日めの午ごろ、私は寝ているところを呼び起こされた。窓の雨戸を叩きながら、先生起きさせえま、と少年たちが呼んでいるのである。私は起きあがって窓を開けた。外には五人の少年たちが、洗面器やバケツや空き缶などを持って立って、私を見ると一列縦隊に並んだ。先頭

65

にいるのは「千本」の長で、かんぶりの顔も見え、みんな泥まみれのはだしであつた。「鮎とつてきただよ。」と長が言つた、「買って<sup>\*</sup>くれせえな、先生。」  
私は彼らの期待に満ちた注目をあびて、自分に拒絶する勇気のないことを悟り、彼らを勝手口へ回らせた。そこでも彼らは一列に並び、ひとりひとりが私に向かって自分の鮎に値を付けさせた。そのときになつて初めて、寝起きのほんやりした私の頭が、<sup>⑥</sup>彼らの<sup>\*</sup>奸悪な計略を理解した。つまり、まとめて売れば安くなるが、一尾ずつなら安い値踏みはできない、と

70

いうねらいなのだ。

「ほら、みせえま。」と彼らはそれぞれの鮎を私に誇示した、「こんなにえつけいだ、五寸くれえあるだあ、先生。」

75

そして「しよつから」へゆけばこれ一尾で一かんは取られる、と言つて互いに頷き、肯定しあうのであつた。私はそこでもまた自分が毘に落ち、縛りあげられたことを知つた。私は彼らの誘導にしたがつて、値段を付け、それらを買取つた。

80

「いいさ。」と私は彼らの去つたあとで自分に言い聞かせた、「味噌煮にしておけばもつからな、当分おらずに困らないで済むわけだ。」

私は前の味噌煮を井へ移して、それらの鮎を新しく味噌煮にしかけた。人は信用しないかもしれない。私自身もこれを書きながら、たぶん人は事実だとは信じないのだろうと思うのであるが、少年たちはその儲け仕事

85

があまりにたやすく、かつ確実であることに興奮と情熱を感じたらしい。  
二、三日するとまたやつて来て、さもうれしそうにはしゃぎながら、窓の戸を叩いた。

「並べつてばな。」と長の言うのが聞こえた。「<sup>\*</sup>おんだらが先だぞ、押すな。」

90

拒絶されようなどは<sup>\*</sup>寸毫も疑わず、確信そのもののような少年たちの顔を見て、それだけで私は自分の敗北を認めた。——ここまで読まれた方は、もはや小悪魔どもが私を放さないだろう、と想像されるにちがいない。私にしても、仮にふところもつとあたたかであつたら、容易に彼らの手から逃れがたかつたろうと思う。人は<sup>\*</sup>黄白の前には、しばしば恥を忍んで屈しなければならぬものだ。少年たちが四度めに襲撃をかけて来たとき、ふところの窮乏という現実<sup>⑦</sup>に助けられて、私はきっぱりと鮎の買い取りを拒絶した。するとそこに、まったく予想しない事が起こつて、私を驚かせた。

95

私に拒絶されて、少年たちは明らかに失望し、途方にくれた。彼らは顔を見交わし、先生が駆け引きしているのではないかと疑い、そうでないことを認めるともつと失望し、どうしたものかというふうになり、それぞれの手にした器物の中の鮒を見まもった。

「みんな。」と長が急に言った、「それじゃあれ先生にくんか。」「くんか」とは、贈呈しようか、というほどの意味である。途方にくれ、落胆していた少年たちの顔に突然、生気がよみがえった。それは⑧ 囚われの縄を解かれたような、<sup>\*</sup>妄執<sup>もうしゅう</sup>がおちたような、その他もろもろの<sup>\*</sup>羈絆<sup>きはん</sup>を脱したような、すがすがしく濁りのない顔に返った。

「うん、くんべ。」と少年の一人が言った、「<sup>\*</sup>なせ、これ先生にくんべや。」

「くんべ、くんべ。」  
「先生、これ先生にくんよ。」とかんぷりが言った、「みんな、勝手へいってあけんべや。」

私は自分の大きな過誤を恥じた。  
⑨ 少年たちに狡猾と貪欲な気持ちを起こさせたのは私の責任である。初めに私は「この鮒をくれ。」と言えばよかったのだ。売ってくれと言ったために、彼らは狡猾と貪欲にとりつかれた。私のさみしいふところを搾取しながら、彼らも幸福ではなかった。その期間、彼らは悪賢い商人だったからだ。私は深く自分を恥じた。

〈山本周五郎「青べか物語」より〉

(注) 沖の百万坪 千葉県浦安市の南方の広大な荒地の呼び名。  
売んか 売ろうか。 えつけえ 大きい。  
みせえま 見なさいよ。  
懐柔 うまく手なずけて、自分の思いどおりにさせること。  
狡猾 悪賢いこと。 貪欲 非常に欲の深いこと。

売んべや 売ろうよ。 木槌頭 額と後頭部が突き出た頭。  
与望 人望。衆望。 五ひやく 五銭のこと。

○三十 三十銭のこと。  
一かん 一貫。ここでは、十銭のこと。

くれせえな くださいな。 奸悪 心が曲がって邪悪なこと。  
おんだら 自分。 寸毫 ごくわずか。

黄白 金銭のこと。 妄執 迷いから起こる執念。  
羈絆 行動の妨げとなるもの。 なせ なあ。

(1) 線① 「少年たちは唾をのみ、水漬をすすり、バケツの側にいた一人は片足の親指で片足のふくらはぎをかいた」について、次のそれぞれの問いに答えなさい。

□① この部分に描かれている少年たちの心情を表した最も適切なことばを、これより前の本文中から二字で書き抜いて答えなさい。

□② このときの少年たちの心情を具体的に述べたものとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア よそ者をだましてやろう。
- イ よそ者が来たから気をつける。
- ウ 大事な獲物を奪われるのではないか。
- エ 「私」がからかっているのではないか。
- オ ひとつもうけるチャンスが来たぞ。

①			
		②	

□(2) 線② 「私を懐柔し、征服しようとした」とありますが、具体的にどうしようとしたのですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 「私」のふところのわびしさを察し、鮒を譲ろうとした。
- イ 「私」に鮒を譲って、精神的に優位に立とうとした。



1 次のそれぞれの文の——線部の漢字は読み方をひらがなで、カタカナは漢字に直して答えなさい。

- (1) 水槽に藻（も）を入れる。
- (2) 激（おどろ）しい自己嫌悪（おん）に襲（おそ）われる。
- (3) 生徒は一列縦隊（おん）に並んだ。
- (4) 事が進展（おん）せず、嘆息（おん）をもらす。
- (5) 道は緩慢（おん）な傾斜（おん）をえがいている。
- (6) 大きなエモノ（おん）をつかまえる。
- (7) アンモク（おん）の了解（おん）をする。
- (8) 珍しい商品にコウバイ欲（おん）がそえられる。
- (9) 人工チヨウミ料（おん）を使用（おん）していない料理。
- (10) ジュースのセン（おん）を抜く。

- (11) やわらかな毛皮（おん）のカンシヨク。
- (12) 人込みにマギ（おん）れて見失う。

2 次のそれぞれのことばを用いて、主語・述語の整った短文を作成しなさい。

- (1) 「おもむろに」
- (2) 「さも」：「いかにも」の意味で。
- (3) 「あたかも」
- (4) 「いかなる」